

《フォーラム》

多神教と一神教
—— 象徴から歴史へ ——

山内 暁子

『ダ・ヴィンチ・コード』¹⁾ 効果を実感する研究者は多いのではないだろうか。 Templar 騎士団やオプス・デイ、さらには問題作『レンヌ＝ル＝シャトーの謎』²⁾ への関心は、この小説によって高められた。何より、史実としてのキリスト像に興味を持つ人が増えている。学生の反応にも生々しが見え、「教養として手がかりだけでも」知りたいという地点からの進歩を感じることができた。「キリストの血脈」が、現実的な研究テーマとして位置づけられるのか、という問題があるとしても、その影響は大きい。映画が製作され、感想を求める学生たちに急かされて私も鑑賞した。数年前の「トロイ」は劇場で何度か驚きの声をあげたが、こちらはどうか。もとよりキリスト教史には歯が立たない身であるから、それほど力を入れずに楽しませて頂いた。世に「解説本」³⁾ が溢れているが、背景となる歴史・美術のあまたの解説を映像にしたため、詰め込み過ぎの感を免れない。だがルーヴル美術館や中世の教会を舞台とした映像には、歴史サスペンスならではの迫力があつた。もっとも、古代史研究者として印象に残ったのは、物語とさほど関連のない冒頭の場面であった。トム・ハンクス演じる「宗教象徴学」教授が講演を行なっている。フィクションならではの華やかな演壇で、写真や絵画を次々に見せながら神々について解説していくのだ。例えば「ホルスを抱くイシス」「牧神サテュロス」が、「イエスを抱くマリア」「キリスト教の悪魔」の原型となっていることが読み解かれる。多神教世界の上に成立したキリスト教の歴史に目を向け、物語で多用されるシンボリズムへの導入ともなっている。

こういった「シンボル」が示すように、旧来の儀礼や慣習の上に新たな宗教が積み重なっていくことは、幾度となく指摘されている。しかし、古代史の宗教研究を「宗教の重層性」という観点から行なうことは難しい。例えば、古代ギリシア人にとって「口外してはならない」⁴⁾ ものであったエレウシスの秘儀は、ローマ帝国の教父⁵⁾ によって、その詳細が伝えられる。だが反対に、キリスト教の儀式においてエレウシス秘儀の影響を跡づけるのは、難しい作業となるだろう。多神教の要素は一神教に溶け込み、一体化している。ヨーロッパの統一原理ともなったキリスト教は、ローマ帝国に存在した「あまたの」多神教を自らの懐に抱えつつ拡大したのであり、そこからエレウシス秘儀ひとつの要素を分離す

るのは困難である。研究者の間で、ギリシアとローマをまたにかけて研究を進めるという観点があり見られないのも、両時代の史料を、それぞれの時代の観点から扱う困難と、また歴史解釈の筋道を示すための誠実さが原因だろう。論文や研究書で「多神教と一神教」を考察するには、大きな覚悟が必要となる。しかし、ここ数年「新書」という形態において、古代社会の「多神教」を扱ったものが多く世に出ている。中には「多神教から一神教へ」というテーマについて真っ向から取り組んだものもある。私に正しく批評できる力はないが、これからの考察の端緒とするべく、紹介するのは意義あることだろう。

私自身が新書を手にとるのは、専門とかけ離れた分野についての、大きな見取り図を頭に入れてしまうためであることが多い。そのテーマが限定的なものであれば、詳細を理解することも容易になる。たとえ「イスラム教」や「源氏物語」、あるいは「エソテリズム」であっても、ひとつのまとまりとして把握できるからだ。21世紀を迎えてから、西洋古代の宗教に関連するものが続けて出版されている。2004年には、アテネオリンピック開催と歩調をそろえて世に出たものも多いが、ここでは「多神教」の地平を見渡すものに着目する。古代ローマからは小川英雄『ローマ帝国の神々—光はオリентより』（中公新書、2003年）と本村凌二『多神教と一神教—古代地中海世界の宗教ドラマ—』（岩波新書、2005年）の二冊、古代ギリシアからはレナル・ソレル著（脇本由佳訳）『オルフェウス教』（文庫クセジュ、2003年）、そして西村賀子『ギリシア神話—神々と英雄に出会う』（中公新書、2005年）である。「神々にあふれる世界」を考察する時に、これらの書物は初学者には有り難い案内人であり、研究者には巨視的観点を提供してくれている。以下ではその内容について考えてみたい。

ローマにおける宗教を扱う時、キリスト教と多神教とは切り離されることが多い。しかし、『ローマ帝国の神々』においては、古代オリエントの神々からギリシアのエレウシス秘儀、エジプト、シリア、アナトリアの信仰、そしてミトラス教といった「異教」である多神教と、ユダヤ・キリスト教の成立が同列におかれている。オリエント史の研究者である著者が述べているとおり⁶⁾、伝統的に別個の研究分野とされてきた宗教を「同時代・同地域の宗教として並列して扱う」のが、本書の特色である。

キリスト教がなぜローマ社会に浸透したのか、という問いに対しても、キリスト教以前に定着していた多神教、特に秘儀宗教への目配りによって、キリスト教がいかなる点で有利であったのか—男女から成る信仰共同体・教会の高い組織力、富裕者による信仰—が説明されている。ローマ社会の実相に接近しやすいところに、この新書の存在意義がある。ローマを「多神教的なもの」として読み解き、キリスト教をそのなかのひとつと考えることによって、「宗教性に乏しい」とされる多神教時代の民衆信仰が、一神教成立を支えていたことが示唆される。また、最後に宿命論との関連において占星術が取り上げられているのも興味深い。新書のため紙幅は割かれていないが、神学の祖ともいえるこの領域への注目が必要であると感じた。

ローマ史からのもう一冊は、扱う時代や領域は重なるが、ひとつのグランド・テーマを「読み解く」試みである。前掲書が、多神教に関する基礎事実を押さえているのに対して、こちらは史実が叙述に従属する。一読して納得するというわけにはいかなかったが、興味深い視点が見られた。古代の宗教は、その詳細が知られていないことも多く、縁起神話や儀礼の次第、歴史的な背景の説明に重きをおく書物が多い。議論が尽くされるのは、細分化された専門領域の中でのこととなる。しかし、『多神教と一神教』は取って替えて枝葉に留まることなく、非常に大きな問題に触れている。宗教を叙述するにあたっては、その「心象の再現」⁷⁾が必要だと主張する著者が描き出すのは、古代人の心性、また心象風景の変容である。大きなテーマの存在によって、通読しやすく引き込まれる。飛躍もあることは確かだが、多神教から一神教への移行を中心に据え、そこに著者独自の筋道を見出したことは、今後の実証的な考察のきっかけとなるに違いない。次にその主張を簡潔にまとめてみよう。

「多神教世界から、どのようにして一神教が現れ、最終的に選択されるに至ったのか」という問題について回答することが、本書の目的である。証拠史料に基づく歴史学においては、いくら考察を重ねても定まるところがないような問いだろう。しかし、ここではスペースの許す限り自由に議論がなされている。まず、著者は「人類から失われてしまった能力」⁸⁾に着目する。時系列的に物事を見る時、遡って何が失われたかを考察することは、新たに付け加えられたことを指摘するよりも、はるかに難しいように感じる。またそれが遡及できるか、実証できるかも問題だ。著者は心理学の領域から概念を援用し、大きな仮説を提示している。いわく、「一神教への移行は、アルファベットという文字体系が成立したことと軌を一にする」。太古の人々は神々の声を聴いていたが、文字の普及と危機の時代によりその声を「もはや聴けなくなった」のである。このように、アルファベットによって失われた能力に着目したところに、従来とは異なる視線がある。声を聴けない人間は神を超越的な存在としてとらえるようになり、それに伴って神々の司る領域は人間の内面へと分け入ってくる。心の内をのぞくようになった人間の新たな規範としての「禁欲」と、それによる「救済」の過程を、著者は見ようとしている。

私自身の問題関心においても、なぜキリスト教が選択されるに至ったのか。また多神教という多様なオプションを抱えた形態から、一神教という限定的な機構をなぜ人々が選んだのか、ということは気になることであった。古代ギリシア宗教史の立場からすれば、これは紀元前六世紀頃から盛んになっていた「密儀宗教」への傾倒の最終段階であり、古代多神教世界において多様な形で信仰されていた「救済」の宗教が、キリスト教というひとつの体系に統合された様子として考えることもできる。ただ、その心性を形成する背景については考察の対象外としていた。史料から分かることの範囲外だと考えていたからだ。しかし、著者が主張する「歴史には不明な部分が多過ぎる」のであり、「歴史解釈にはどこか文明思想としての役割があるのではないか」⁹⁾との問いかけは重要だ。本書はあまりにも「思想」あるいは「思索」的だと批判を受ける可能性もあるが、日本の西洋史研究において

そのような問いかけを積極的にすることは、ひとつの義務であるだろう。ヨーロッパは、その主張するルーツとは異なる起源を有するもので、もはや古典文明とキリスト教のみに拠るとの認識は共有されていない。オリエン特、あるいはイスラムの影響を考えることは、今では当然となっている。著者の問題関心は、かなり「心性」の方へと傾いてはいるが、キリスト教成立におけるオリエン特宗教の影響と、地中海世界全域に広がったムーブメントとしての「アルファベット化」を結び付けたのは独自の視点だと言える。議論の細部については、具体的な批判や賛同は避けておく。「実証できない」議論と著者自身が認めていることであり、それはまた新たな考察に譲ることとしよう。

さて、ギリシア史からも二冊を紹介したい。一冊目は「ギリシア神話」の本である。ギリシアといえば神話…というイメージは遍ち行き渡っており、人気も高い。邦訳のあるギリシア宗教関連書を考えてみても、歴史ではなく「神々」について書かれたものが圧倒的に多い。西村賀子『ギリシア神話』は、その冒頭部で、現代社会における 'trivia' としてのギリシア神話を取り上げて読者の関心をつかもうとしている。講義内で学生が最も感銘を受けるのは「ナイキはニケーに由来する」といった知識であることによく対応しており、また神話のカタログスにも陥っていない。本書で私が面白いと感じたのは第三章「ギリシア神話における生と死」と第五章「怪物考現学」であるが、ここでは前者について触れておく。ギリシア人の死生観は看過されたテーマではないが、本書では「魂」についての多様な観点が平易に説明されており、読みやすい。ギリシア人の死生観には極端さ、つまり「現世主義」と「厭世主義」がつきまとう。これを哲学や悲劇の枠内ではなく、神話に表れた日常的なレベルの死生観として扱っている。加えてエレウシスなどの秘儀思想に触れることによって、「来世での救済」を願う人々の存在にも注意を向けている。ローマ史の二冊で取り上げたように、キリスト教への橋渡しで重要な役割を果たしたのが、これら「救済」の宗教であることを考え合わせると、当該テーマを概観した意義は大きい。専門書では難解な議論になりがちであり、また今までの「神話書」が書き得なかった視点と言える。また、魂と怪物の造形からギリシア人を見る作業が、ややもすれば平板になりがちな神話語りに歴史的な刺激を与えてくれている。

最後の『オルペウス教』は、これまでに挙げたものとは異なり、より専門的なテーマを分かりやすく紹介した本邦初のものである。これから秘儀思想について学ぼうという人は、幸運である。かつての私のように、ケルンの『オルペウス教文書断片集』¹⁰⁾を片手に途方にくれることもないであろう。邦訳によってオルペウスの書物にも格段に近付きやすくなった。さて、「オルペウス教」は、実は伝説の音楽家「オルペウス」とほとんど関係を持たない。オルペウス教の教義の根幹を成すのは、「ディオニュソス神話」であるが、また一方でその信仰はいわゆる「ディオニュソスの秘儀」とは全く別物である。これが簡潔に整理されているところに、まず本書の意義がある。さらに、オルペウス教は「アスケシス」つまり「禁欲」の思想を初めて強烈に打ち出した宗教だと明示される。それは同じく禁欲を

掲げたピュタゴラス教徒と大きく隔たっている。ピュタゴラスの徒は、ポリスの中での信徒の活躍を重視する「市民派」を形成し、その「禁欲」も、ポリスの法慣習に背くものではなかった。だが、オルペウスの信仰には「人間には神の一部が宿っている」という思想がある。これは神と人とを峻別するギリシア人の考えとは全く異なるものだ。またピュタゴラス教徒が共同体を形成し、政治にすり寄る傾向を見せたのとは反対に、オルペウス教徒は結社において突出せず、個人的信仰が深化する。墓の副葬品として「金板」が見られることがその特徴であり、入信者の来世での救済が明記されている。救済の考え自体はエレウシス、ピュタゴラス、あるいはディオニュソスの信徒たちとも変わらないが、その出発点においてオルペウス教徒は彼方にある。それは自らの中に神的要素を認める点であり、ポリスの血の犠牲に真っ向から対立する教義である。オルペウスの金板には、神的要素を「忘れない」ための合言葉が不可欠なものとして繰り返し現れる。ディオニュソスのオルギアにおける神との合一や、エレウシス秘儀への入信による幸福の保証、あるいはピュタゴラス教にみる魂の転生とも違った特色はここにある。ただオルペウス教のみが、その信仰の根底にギリシア宗教における絶対的観点を欠いていた。すなわち、神と人とのへだたりの否定であり、犠牲式によって繰り返し強調されていたはずの「人の取り分」に対する強烈なプロテストである。

オルペウス教徒たちは、ギリシア社会におけるキリスト教徒のような存在にも見える。モミリアーノも指摘するように¹¹⁾、「不敬虔」に「異端」の意味が含まれるのはキリスト教以降のことであり、ギリシア人は神や儀式を外来であるという理由だけで排斥することはなく、「不敬虔」とは神に対する逸脱行為を指すものであった。ギリシア人は「異端」を意識することはなかったが、ただオルペウスの徒のみは真に「異端的な」教義を持っていたとの認識は重要である。独自の神話、異質な儀礼、しかし彼らは結社を作る力に欠けていた。プラトンの言う「オルペウス教の入信指導者」¹²⁾とは、うさんくさい町の変わり者でしかない。信徒は私的に信仰を深め、人知れず金板を胸に眠りについた。しかし、その信仰の独自性には、これからさらに考慮がなされるべきだろう。歴史の中で「救済」の宗教にひとつの道筋を見出すこと。そこから、一神教から多神教という大きなテーマの地平線が見えてくると思われるからだ。21世紀に入ってから、あるいは9.11以来、私たちは一神教という思考システムについて、別の観点から考えるようになった。古代社会はどのようにしてこの新しいシステムを受け入れ、それと一体化したのか。冒頭に述べたシンボルの世界や本村説が問いかける問題に、いまや歴史家が本気で対峙する時がきているように、思われてならない。

註

- 1) ダン・ブラウン、『ダ・ヴィンチ・コード』（角川書店，2004年）。歴史に題材をとってはいるものの、註 2) に挙げたように、物語は多彩なフィクションによって導かれている。
- 2) マイケル・ベイジェント、リチャード・リー、ヘンリー・リンカーン、『レンヌ＝ル＝シャトーの謎―イエスの血脈と聖杯伝説』（柏書房，1997年）。偽書に基づいて「シオン修道会」を実在するかのよう扱ったが、結局フィクションであると公表された。『ダ・ヴィンチ・コード』においては「シオン修道会」の存在が物語の核となっている。
- 3) サイモン・コックス『ダ・ヴィンチ・コードの謎を解く―世界的ベストセラーの知的冒険ガイド』、PHP研究所，2004年など、批判的なものも含めて関連書は二十数冊を数えている。
- 4) 古くはヘロドトス、またローマ時代においてもパウサニアスがそのように述べて秘儀の詳細に立ち入ることを避けている。Hdt. 9. 65; Paus. 1. 14. 13; 1. 38. 7.
- 5) アレクサンドレイアのクレメンスなど。Clem. Protr. 2. 21. 2.
- 6) 小川英雄『ローマ帝国の神々―光はオリエントより』、194頁。
- 7) 本村凌二『多神教と一神教―古代地中海世界の宗教ドラマ―』、6頁。
- 8) 以下の議論が根拠とするのは、フロイト説に基づく社会心理学者岸田秀の仮説、およびジュリアン・ジェインズによる「二分心」の概念である。「二分心」を提示したジェインズの著作『神々の沈黙』は、折しも2005年に紀伊国屋書店から邦訳が復刊された。
- 9) 本村前掲書，74頁。
- 10) Otto Kern, "Orphicorum Fragmenta", Berlin, 1922.
- 11) アルナルド・モミリアーノ（桜井万里子訳）、「古典古代世界における不敬虔」、『異端の精神史』8-24頁（平凡社，1986年）。古典古代の不敬虔とは、教義の否定ではなく、宗教慣行にそむくことであつたと指摘される。
- 12) Pl. R. 364b-365a. cf. Thphr. Char. 16. 12.